

飯高生へ③

学校長 角 秀 明

10月に入り、今年度も後半戦を迎えた。後半戦最初の行事は本校伝統のマラソン大会である。今回が62回目となるはずであったが、今年に入ってから地震と水害で道路状況が悪化し、市営グラウンドでの4kmの代替走を行なうことにした。第1回は、私が生まれる前年の昭和38年10月7日に男子7km、女子3kmで実施された。私の時代には男子10km、女子6kmに延長されていて、当然、嫌々ながらに3年間走った記憶がある。一方で、校長として赴任した昨年度からは体育の授業でのマラソン練習に積極的に参加させてもらっている。皆さんから見れば、かなりのちんたら走りに見えるかも知れないが、一生懸命に自分の限界にチャレンジしながら走っている生徒と一緒に秋空の下で走ることは気持ちの良いものである。

校内球技大会とは違い、マラソンはいきなり実施すると病気や怪我につながるため、9月になるとマラソン大会の練習が始まる。実は、この1ヶ月半ほどの練習や本番は持久力・体力とやり遂げる力を養うのに絶好のチャンスなのである。特に、部活動が終了した3年生は体力が落ち始める時期であり、これからの受験期を目前にして今一度体力を充電しなおし、免疫力を高めるために重要な学校行事である。従って、私が担任をしていた頃は「夢と希望を持って走れ!!」と生徒を叱咤激励していたものである。また、「やり遂げる力」や「忍耐力」はアメリカの経済学者J.J.ヘックマンが提唱している非認知能力の要素であり、学力が向上する生徒はこの非認知能力が備わっている。つまり、体育の授業でそれらの力を習得することが合格通知を引き寄せることにもなる。そういった意味で日本に数ある高校の中でも、本校体育科の先生は受験結果に大きく寄与していると言える。

「やり遂げる力」を養うことは学力を向上させ、そして、受験を最後までやりきることにもつながる。例えば、薄い問題集であっても1冊やり遂げるとかなりの力が付くし、後期試験まで粘れば、周囲に諦めムードが漂っている中、ご馳走にありつける可能性も高くなる。この後、受験が佳境を迎えるような頃になると、受験の大変さから逃げ、「浪人」を口に出す生徒も出てくる。浪人生は3分の1が伸び、3分の1が現状維持し、3分の1が伸びるどころか下降すると言われている。どうであろうか。今を頑張れずに努力の先延ばしをした人間がどのカテゴリーに入るのか、考えて欲しい。浪人は最後まで精一杯やりきった結果、その選択を余儀なくされた者のみが、する価値があるのであり、現実逃避で浪人した者は良くても現状維持にしかならない。受験はその人の人生の縮図であり、この後の生き方も透けて見えてくる。つまり、豊かで健康な生活を営むために、マラソン大会はその一翼を担っている行事なのである。

体育祭やマラソン大会が終わると、これといった学校行事がなくなる。食欲の秋、読書の秋、芸術の秋、スポーツの秋と、秋は多くのことに適した季節である。食欲とスポーツが両立できれば健康的な生活を送ることができ、読書や芸術に造詣を深めれば情操を育むことができる。秋の夜長を勉学に費やすもよし、スポーツや読書につき込むのもよし、自身の成長につなげることで、収穫の秋にして欲しいと願っている。